

唐代小説柳毅傳の?會背景よりの考察

著者	内山 知也
著者別名	UCHIYAMA T.
雑誌名	漢文學會々報
巻	13
ページ	24-28
発行年	1951-11-15
URL	http://doi.org/10.15068/00147692

(二) 此介音之後隨有中元音之較細者或後元音。

(註12)「中國音韻學研究」(華譯) P. 430—436

(註13) 羅常培著「知・徹・澄・娘音值考」(C.Y.Y. 3—1)

(註14) 有坂秀世博士著「國韻音韻史の研究」(P. 208—209)

(註15)「中國音韻學研究」(華譯) P. 256—263

唐代小説柳毅傳の社會背景よりの考察

内山知也

一、社會的制約の問題

柳毅傳は唐代傳奇小説の中でも神怪小説に屬し(註1)、若い儒學生と龍女との交渉を物語る作品として古くから識られている。全篇三九八四字より成り(註2)、唐代傳奇小説の中では最も長篇の部類に屬している。柳毅傳は他の通常唐代傳奇小説と呼稱せられている作品群と同様に現代の小説の範疇に入れる事は難しく、むしろ創作性の僅かに認められる物語 Short story ともいふべきものである(註3)。その非創作的部分というのは、主として當時の社會に於ける俗信に基く説話的部分であつて、創作的部分というのは、作者の明らかに敷衍し、描寫を濃やかにし、構成を新たにしたりと想像される部分である。即ち柳毅傳はそれ自體完全なる一個の創作ではなくして、當時の民間に行われた説話を基礎としてその上に作者の裝飾が施されて完成したものである。唐代傳奇小説には柳毅傳の如く説話の内容を根幹として構成せられた作品群の他に、史傳を中心とし専ら社會的地位の高い人物の裏面生活を描くもの、即ち史傳的形態を取る作品群、唐代に初めて出現した男女間の愛戀の交渉を主題としてその顛末を物語る作品群等があるが、是等はすべて強い社會的制約の基盤の上に立つて物語を展

(註16) 新村出博士著「國語に於けるF日兩音の過渡期」(東亞語原誌)

参照

(註17) 無着道忠の撰。古臨濟曹洞系唐音を傳ふ。有坂博士「國語音韻

史の研究」所收「瀕瀕の唐音に反映した鎌倉時代の音韻狀態

参照。

開している事は最も當時の倫理觀に制約される事がなく振舞つてゐるかの如き愛戀の物語に於てすらも容易に想見する事が出来るのである。その強固なる社會的制約とは、小説に對する中國人の古代よりの變らざる批判的態度と關心によるもの他に、唐代特有の社會狀態の及ぼす影響を意味するのである。柳毅傳といはず唐代傳奇小説の作品群は、現代小説の如く作者の自己告白によるものではなくして、或る事件の時間的描寫に始終する事が多い爲に、その展開される事件の素材となつた現象的諸要素(人物、場所、行爲、風俗、習慣等)は必然的に社會的制約(社會的道德觀、思潮、嗜好等)に即應せざるを得ない状態に在つたのである。即ちここに述べる柳毅傳や其の他の神怪小説群の如く現實的には到底生起し得ない様な荒唐無稽な事件の文章が當時承認されて物語られ、しかも後世に講談(註4)として或は戯曲として發展し傳えられるに到つた事實は如何なる可能性に基づくものであらうか。それは當時の人士のその様な非現實的な事件も或は起り得るといふ信仰と、或はその物語の中に描寫されている人物の行爲や事態に對する同感と興味の發生の後押がなければ考えられない事である。非現實的なものへの信仰はただ一個人によつても抱かれ得るが、これが一篇の文章として世に問われる場合には同様な信仰が既に世間

に容れられて在らねばならず、同様な信仰的經驗と共感とを基盤として考えられなければならない(註5)。もしこの様な先行條件が除外している場合には作者は世の痛烈な批判的となるのである。柳毅傳のこの荒唐無稽な物語が極めて現實的な中國人の非難的となる事なく長く後世に傳えられた所以は、柳毅傳の物語への世人の興味と相俟つて之を容認する廣い思想的基盤が存在したからに他ならない。即ち柳毅傳に於ける社會的制約は吾人がここに現存する柳毅傳の作品を通じて遙かに想見した結果得たものに過ぎないけれども、柳毅傳の作者はこの規範より殆ど出ずる事なくして物語を製作しているかの如く思われるのである。かくて社會的制約による描寫の部分を除いた柳毅傳の創作的部分は、その龍神の物語の世にも不思議な所に在るのではなく物語の構成、裝飾的辭句の中にしか存在しないのである。

二、製作年代の問題

多くの唐代傳奇小説と同様に柳毅傳の創作年代は明からにされていない。それは柳毅傳自体に明瞭されていない事と、著者と見做される李朝威なる人物の經歷が全く不明である事が大いに與つてゐる。僅かに柳毅傳の内容からその年代を臆算してゆくと、物語は儀鳳年間(A. D. 676~678)から貞元七年(A. D. 791)前後を包含するの事當然それ以後に製作せられたものである。大和年間(A. D. 827~835)に題材を取る洛神傳には既に柳毅の物語が世に行われてゐる事に對する批判の問答の場面が見えてゐるからやや正確な年代は七九一年前後から八二七年前後の間である事が一應考えられるが、この洛神傳も又製作年代が正確に明らかでないからかくの如く斷定する事は危険である。又太平廣記の濛陽湫の(註6)記事にも柳毅の物語に觸れてゐる部分があるが、この文の出典は不明であるから之を以て推測する事は不能である。かくの如く柳毅傳の製作年代は明らかでないが柳毅傳を透して得る社會的制約の形態によつて大體その年代を窺う事が出来るの

である。即ち柳毅や龍女達の行爲を基礎付けてゐる社會的制約の形態を見出して、之を他の、ほど時代の明らかなる類型と比較して結論づけようとするのである。

(1) 思想的背景よりの考察

先ず第一の方法として考えられる事は主人公柳毅の取つた生活態度の考察である。柳毅傳には柳毅の社會的地位に對する欲望と、富に對する關心と、延命長壽に對する執着の三つの人間性が龍女との交婚の物語の中に滲出してゐるのである。それ故に讀者が前者の神仙的な面を強く感ずる時には柳毅傳の物語は怪小説の類と見做され、後者の柳毅と龍女との交婚の方を重視するならば一種の艶情小説と稱する事が出来るのである。柳毅傳に於ては是等の欲望が時代的な嗜好とmoralの制約によつて獨特な型で表現せられてゐるのである。即ち彼の社會的地位への欲望の表現を見ると、彼は一介の儒學生として官吏登用試験に臨んだが、之に失敗してからは之にこりてか二度と官界進出の欲望を絶つて富の蓄積と神仙の世界へ逃避してゐるのである。之を中唐の作品枕中記や晚唐の作品南柯太守傳の主人公の生き方に比較する時にその同異を明瞭に認める事が出来る。枕中記の主人公の社會的欲望は中唐の社會背景の下に先づ官吏試験に及第し出でては將入つては相の人臣として最高の政治的位置を占め以て一族の繁榮を計る事であつた。又南柯太守傳の主人公は晚唐の社會背景の下に直ちに天子の駙馬となり、一郡の太守となつて一方を治める事であつた(註7)。この二作品の主人公盧生及び淳于棼に於ける金錢的な繁榮と神仙への逃避は、政治的地位の獲得によつて齎らされる結果であるのに、柳毅の場合はその過程を経る事なしに直ちに結果を迫り求め、政治的地位を棄てて顧みなかつたのは何故であるうか。思うにそれは柳毅傳の作者及び作者の屬する社會の嗜好が政治的進出の方向への努力よりも更に財富と神仙長壽への欲求に強かつた事によるものではなからうか。西紀八〇

○年前(註8)餘り遠くない時代に製作せられた枕中記には地理的に華北を背景として、權門と財力の後援のない者が政界に進出する事は全く困難である事を暗示し、一切の政治的欲望はすべて空しいものであるとのぎりぐりの見解から盧生も又神仙に思いをひそめるのであつたが、之に相前後して製作せられたと思われる柳毅傳は、華南を背景とし政界への進出に逸早く見切りをつけ江南の商業都市に進出して家財を蓄え悠々と長壽の法を講ずるのである。枕中記が北方的であるのに對して柳毅傳は多分に南方的であり、この様な地方的な人生觀の差異がほど同時代に素材を採つて製作された兩物語にその傾向を異にせしめたものであらうと考えられるのである。

(2) 道徳的背景よりの考察

第二に柳毅と龍女との交渉を見るならば、彼が龍女の難を救う爲に一役買つて出たのは外見止むに止まれぬ義侠心からの如く見えるが實は彼の女性に對する好奇心によるものであつた。彼の龍女の面前で開陳した義侠の科白も彼女と結婚した後の或日の會話によれば實は彼女の憔悴した外貌に打たれた事から發したものであつた。その様な美しい愛戀の交渉に於ても柳毅が處々に片苦しい義侠の科白を述べさせられ、又洞庭王の龍宮では荒々しい龍神錢塘王の龍女との結婚申込みを正論を以て辭退せしめているのは、彼女が涇陽君の妻であり結果として遂に彼女の夫を殺して結婚する事になつたので、この不倫な行爲の結果に對する辯解の言葉が必要であつたのである。義侠的行爲に於ける moral の要求は同じく徳宗の建中年間に題材を取る劉無双傳の古押衙の言動(註9)に現われている。その行爲は全體から見れば必ずしも正當ではないのに、義の爲に身を挺して己を顧みない騎士的態度が尊敬の急を以て描かれているのである。然るに晩唐の藩鎮間の暗闘を題材とする劍俠小説を見ると、崑崙奴傳と言ひ紅線傳と言ひ皆卒然としてその主君の爲に盡すのみで、正義に基く義侠の言葉も moral

に對する辯解も予め添えられていない。この事は晩唐の混亂した時代には既に moral の裏付けを必要としなくなつていたのではないかと考えられるのである。小説の内容或は製作の態度に moral の最も要請せられたのは中唐の古文運動のみに發展した時代であつた。この時代に於ては古文家の間に小説を作る風が盛となり、從つて之に對する世の批判的態度も朋黨の紛争と共に激烈なものがあつた。殊に社會倫理に反し非現實的な事件を主題とする物語に於てはその辯解の言葉が大いに必要であつた。その著しい例證として韓愈の毛穎傳に對する世人の非難に柳宗元(註10)が讀韓愈所著毛穎傳後題を著して辯護した如きを擧げる事が出来る。かくて小説中に當該小説が社會倫理に反しない理由を辯解する議論文が添加される風習が行われる様になつた。例えば遊女と前途有爲の青年の交渉を物語る李娃傳(註11)に於ては、かの青年が成都府參軍となり遊女李娃を自分の妻とする事になつた末に、一篇の議論文を附し李娃の節操を讃える事によつて低い階級に屬する者との婚姻行爲を正當化しようとして試みているのである。又狐の女妖との交渉を物語る任氏傳(註12)、夢判斷によつて舅夫の仇を討つ謝小娥傳(註13)、愛人を詭計を以て奪換する章台柳傳(註14)等は皆その例である。纏えつて柳毅傳を見るならばその傾向は古文運動の隆盛時代程に露骨ではないがその傾向の漸く現われ始めた事は枕中記よりも顯著である。結婚の moral について見れば、龍女の變身盧氏は前年夫を失つた未亡人であり、彼女を娶つた柳毅は先年張・韓二夫人を亡つている。にも拘らず容易に再婚が行われ衆人羨望の的となつたのは、龍女が范陽の盧氏なる唐代の大豪族の出身であり、柳毅も又新興の富豪であつたからである。白樂天(註15)は貧家の子女の嫁し難きを歌ひ孟東野(註16)は男子に比して女子の再婚の難しい事を詠じて戰慄に疲弊せる一般民衆の有様を示しているが之に反して富豪や門閥の場合にはかゝる束縛はなかつたのである。雲溪友議(註17)には貧しく何時迄も出世しない夫を棄てて新たな配偶を探そうとした女を顏真卿が

罰し江南地方の女が無能な夫を棄ようとす悪風を禁遏した物語がある。かくの如く平和時に於ては離婚再婚が割合と容易に行われ、邊疆多難なりし時でも富豪階級にはその影響が少なくなつた事を知るのである。かくて柳毅傳の製作年代は枕中記の作者沈既濟の歿年(A.D.800)前後より朋黨の政争の烈しくなつた八一〇年頃迄と考えられるのである。

(3) 説話的背景よりの考察

第三に柳毅傳の龍説話的部分を見る時は、遙か神話時代より認識せられてゐる龍の形態及び諸機能(註18)(1)雷、雨と關係のあるもの、(2)水神と關係のあるもの、(3)水神(註19)として鐵を恐れるもの、(4)昇天飛翔するもの、等の諸點についてその痕跡を認める事が出来る。更に柳毅傳の龍神達がすべて擬人化せられて描かれている事は李靖(註24)の物語と共に唐代傳奇小説の龍の取扱方が前の時代よりも擴大されてゐる證據である。鳥獸や爬虫類植物等が人間に變化する物語は柳毅傳以前より多く存在するけれども龍が人間に變化する物語は甚だ少い。これは龍が神獸として架空的に想像せられたものである事に依る所が多いと思われる。六朝末の作と思われる梁四公記を出典とする震澤洞(註20)の龍宮の場面に見える女性の龍神は未だ明らかには擬人化されていないが、年經た龍は人間に出る事も可能であるという記事もある洛神傳(註21)に、柳毅傳の龍が人間と婚する事の間答があるのはこの思想のまだ割合と新しい事を思わせるのである。又龍同志(註22)の交婚も龍と龍(註23)との鬭争も柳毅傳の特別の創作ではなくて同様な信仰のあることは明らかである。以上の様に柳毅傳の龍神の描寫は多く當時の俗信に基くものであつて必ずしも作者の創作に成るものではないのである。

以上僅かな資料により唐代傳奇小説柳毅傳を社會的背景よりその性格と成立年代の概略を窺ふ事を試みたが、或は獨斷と誤謬のそしり無

しとしないのである。

〔略註〕

- (一) 鹽谷溫氏、支那文學概論ノ分類ニヨル。
- (二) 天都黃曉峰刻本太平廣記ニヨル。
- (三) 桑原武夫氏、文學入門一一二頁參照。
- (四) 吉川幸次郎氏、元雜劇研究二九七頁參照。
- (五) 周秦行紀ノ惹起シタ反響ハカクノ如キ場合ニオケル例デア
- (六) 太平廣記卷四二四ノ十三條。
- (七) 劉開榮氏唐代小説研究八三頁參照
- (八) 枕中記ノ作者沈既濟ノ歿年、
- (九) 古生は王仙客ノ爲ニ彼ノ愛人劉無双ヲ救ヒ出シ自ラハ責ヲ負ツテ自殺スル。
- (十) 劉河東集卷二一參照。
- (十一) 李娃傳ノ文末ニ、嗟乎、倡蕩之姬、節行如是、雖古先烈女不能踰也、云々トアリ。
- (十二) 任氏傳ノ文末ニ、嗟乎異物之情也、有人焉、遇暴不失節、狗人以至死、云々トアリ。
- (十三) 謝小娥傳ノ文末ニ、君子曰、誓志不捨、復父夫之讐、節也備保難處、不知女人貞也、云々トアリ。
- (十四) 章台柳傳ニハ、夫事由跡彰、功待事立、云々トアリ。
- (十五) 白樂天「議婚詩」・「婦人苦」等アリ。
- (十六) 孟東野「靜女吟」等參照。
- (十七) 光緒石印本唐代叢書三集二葉。
- (十八) 出石誠彦氏、支那神話傳説の研究九一頁「龍の由來について」、森三樹三郎氏、支那古代神話二四八頁參照。
- (十九) 石田英一郎氏河童駒引考、一八二頁參照。
- (二十) 太平廣記卷四一八ノ九條。

(二十一) 洛神傳ニ、曠因語織織曰、近日人世或傳柳毅靈姻之事、有

之乎、女曰十得其四五爾、餘皆飾詞、不可惑也、トアリ。

(二十二) 太平廣記卷四二四ノ十三條ノ前半參照。

(二十三) 新唐書卷三六五行志ニ、開元十四載七月、有二龍、鬪於南

陽城西、云々、其他ノ例アリ。

(二十四) 太平廣記卷四一八ノ十四條。

(以上)

筆者紹介

竹田 復

東京教育大學教授
文學博士

鎌田 正

東京教育大學助教授

松下 忠

和歌山大學助教授

藤川 正數

香川大學助教授

緒形 暢夫

東京教育大學助手

坂井 健一

東京文理科大學研究生

内山 知也

東京文理科大學研究生

東京文理科大學漢文學會々則

昭和二十六年六月二十日現在

一、本會は東京文理科大學漢文學會と稱し事務所を東京文理科大學漢文學研究室に置く。

二、本會は漢文學の研究と普及を圖るのが目的である。

三、本會の會員は左の通りである。

1. 東京文理科大學及び東京高等師範學校漢文學科關係の教官(退官者を含む)及び講師

2. 東京文理科大學漢文學科の學生及び卒業生

3. 其の他入會を希望するもの

八、本會々則の變更は委員會の審議を経て總會出席者の過半数の承認を得なければならぬ。

1. 總會 年一回
2. 例會 年約四回
3. 會報及び會員の名簿の發行
4. 其の他必要な事項

五、本會の役員は左の通りである。

會長一名、委員「九名」若干名
會長は本會を代表し、委員と共に運営に當る。

委員は委員會を組織し、會の研究・會計・庶務の業務を分擔する。

七、會長には主任教授を推す。

「委員は東京文理科大學學生中から五名、其の他から四名(内

「」内は、變更されて現行會則になる前の原會則の部分である。